



歌人 森重 香代子さん

今回のまちの主演は、長年にわたって歌人として活動을続け、現在も山口県歌人協会の顧問を務めるなど、地域での文化活動促進に取り組む森重香代子さんを紹介しします。

短歌という
一形式を
信頼し続けて
短歌との出会い
歌人との出会い

昭和30年夏、大学在学中の森重さんは、書店の棚で一冊の歌集に出会いました。それは、北原白秋直門の歌人、宮柊二の歌集でした。「心惹かれて、すぐに買い求めたのですが、実に不思議な運命的な出会いでした」と森重さんは話します。宮柊二の歌集に心を惹かれた森重さんは、卒業論文に「宮柊二論」を書き、その縁で宮柊二の主宰する「コスモス短歌会」に入会しました。その後、O先生賞、コス



▲歌集『末紫』の本扉。書：宮柊二「こんなふうにして書いてくださるのは珍しいんですよ」と森重さん。

山口市で生まれ育った森重さんは、昭和60年、まだ直木賞受賞前だった作家の古川薫さんとの結婚を機に下関で暮らし始めました。そして、下関の地に「香臈人短歌会」を誕生させ、歌誌「香臈人」の発刊とともに下関、山口、周南の各市で毎月4回の短歌教室を開き、現在も続けています。また、古川さんと山口県内を歩き、歌文集『周防長門

下関との出会い

モス賞を受賞し、昭和57年、最初の歌集『末紫』を出版しました。本扉の題字について、「これは宮柊二の字なので、頼まないのに書いてくださいました」と本を丁寧に掲げながら話します。





まちかどボイス

今月のテーマ
あなたのストレス発散法



桃の枝えに
干したる足袋を
夕べ来て
むらさきあかねの
空より降ろす

『末紫』より



▶平成17年、古川薫さんが撮った写真。写真を見て森重さんは、「私、喜んでいきますね。この頃は、古川が病気になるなんて思っていませんでしたから」



▶巖流島の歌碑。
書：古川薫
「石碑の底に、古川と私の爪などを埋めました」と森重さん。

地域文化功労者表彰

長年にわたって歌人として活動が続けてきた森重さんは、平成28年に、文部科学大臣が表彰する地域文化功労者に選ばれました。表彰を受けて、「短歌という分野に目を注いでいただきうれしかったです。情熱を失うことなく、歌友たち

はわがふるさと』を共著で出版しました。この歌文集では、巖流島や長府などに関連した歌が詠まれています。巖流島には、森重さんの作歌50年と歌誌「香臈人」の創刊10年を祝って、「香臈人短歌会」の会員が歌文集から一首を選び、建立した歌碑があります。

編集後記

■この特集を読んで、少しでも行動を起こしてください方が現れ、悲惨な動物たちが、一匹でも救われることを切に願います！（ひ）
■子どもの頃、バク転ができるようになりたくて、練習しましたが、できませんでした。やっぱり、バク転ができる人はかっこいい。（き）
■本の世界、生き物の世界、短歌の世界。どの世界も面白そうだなと思いました。それぞれの魅力が皆さまに伝わればと思います。（と）

とともに継続していきたいと改めて思いました」と当時の思いを話します。長年の活動を振り返って、「毎月毎月、歌を詠み続ける作業は大変でしたが、それでも歌を離れずきたのは、31音の中に人生を込めるといふ充足感が、ずっと消えることなく続いてきたということでしょう。よくもまあ、同じことを飽きないで60年以上も」とほほ笑む森重さん。
「もう少し男の人たちにも短歌というものに興味を示してもらえると良いのになと思います。短歌の魅力が伝わるように、もっと頑張らないと」と短歌への情熱は尽きません。